

豊後守岡遺跡出土の平安時代土師器

玉 永 光 洋

(一) はじめに

守岡遺跡は、大分市大字曲字森岡に所在し標高約六〇メートルの独立丘陵上に位置している。遺跡は学校建設に伴って昭和五一・五二年の二年次にわたり大分市教育委員会によって調査されている。そして昭和五四年にその概要報告^{注1}がなされている。それによると弥生時代の中期から古墳時代初頭にわたる大規模な集落遺構と「豊後国志」にみえる守岡堡と推定される中世後半代の城郭遺構ならびに平安時代の遺構が検出されている。その内、弥生・中世期の遺構が主体を占め平安期は極めて少ない。今回その極めて少ない平安期の遺構より出土した土師器についてのべることにしたい。

この土師器はすでにその大半が報告されているが概要報告の制約から十分な説明がなされておらず、また実測図も小さいなど不備な点が多い内容となっており、この資料が土器研究の対象とされたことはない。

県内の古代・中世土器の編年的研究は長い間渋滞^{注2}していた。しかし、最近の発掘調査の増加に伴ない良好な一活資料が検出され、その研究は除々にではあるが進展をみせている。しかし、平安時代に関する資料が少なく空白になるところが多く、守岡遺跡出土の土師器を補完する資料も現段階にいたっても見当たらないため、今回再録し当該期における土器研究の一助としたい。

(二) 土器の分類

守岡遺跡において平安時代の遺物を出土した遺構は少ないことはすでにのべた。その内比較的まとまった状況で出土した遺構を上げれば次の5遺構である。隅丸の長方形をなす土壙(3・4・13号)・皿状の不定形堅穴(32号)・柱穴である。

これらの遺構より出土した土師器の特徴を結論からのべれば極めてよく似た特徴が看取でき、微妙な差があるもののは一期の所産であると考えられる。従ってここでは、各遺構より出土した土器を一括して分類を行ない各器種ごとの特徴をのべていく。器種は椀・坏・小皿・脚付皿が出土している。各遺構より出土したセット関係は第一表のとおりである。

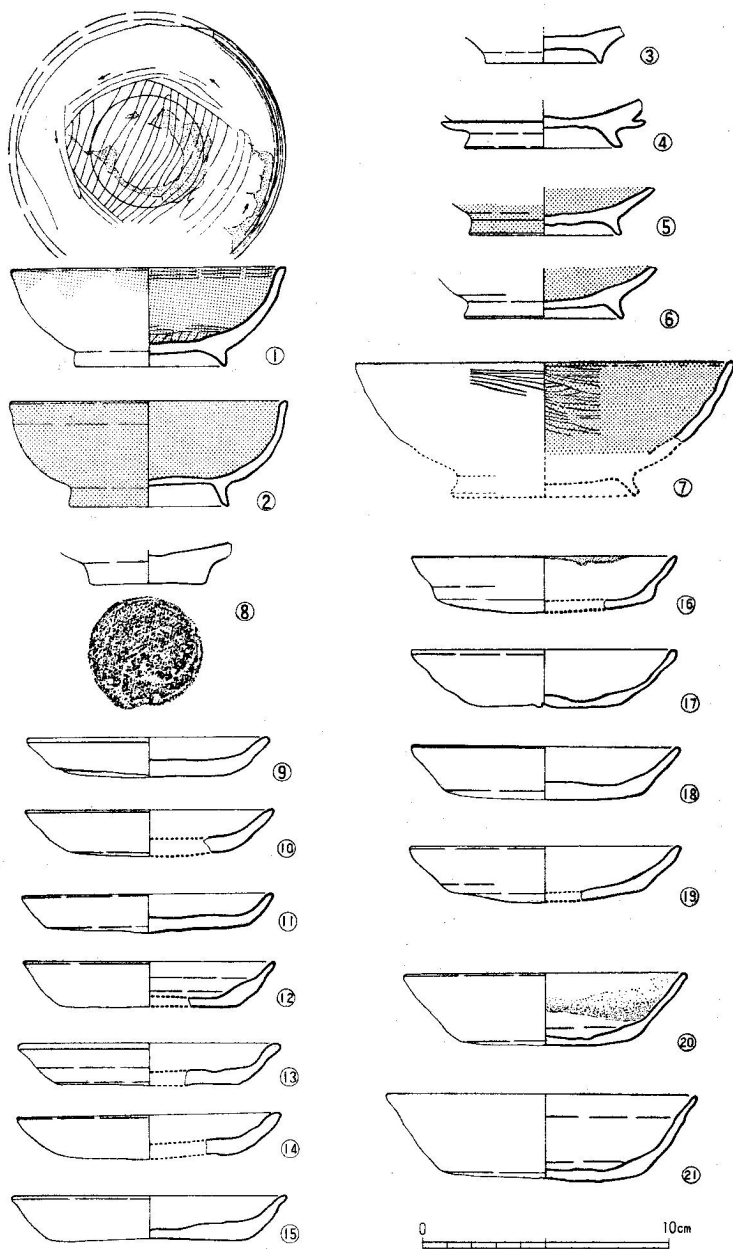
椀 いわゆる黒色土器A・B類と土師器の椀がある。数量は黒色土器が5点・土師器が2点で黒色土器が多い。

A類 口径一一・二センチの小振りの椀①と約一五・四センチの椀⑦がある。高台は全体的に低く断面三角形形状を呈すものとやや外反してふんばるものがある。体部がゆるやかに内湾して立ち上がり口縁下部でかるい稜をもちやや外反し端部を丸くおさめる①と外反せずそのまま立ち上がる⑦がある。調整は内面はヘラミガキをていねいに行なっている。外面はヘラミガキ・ヨコナデ(口縁部・底部)及びナデ仕上げとなっている。胎土は多くの砂粒を含むが比較的良好である。3点出土している。

B類 2点ある。A類とはほぼ同じ特徴を有している。①と②は高台の形状や器壁の厚さなど異なっているものの法量はきわめて近い値を示している。また、⑤・⑥はA・B類の底部破片であるがよく似た造りである。

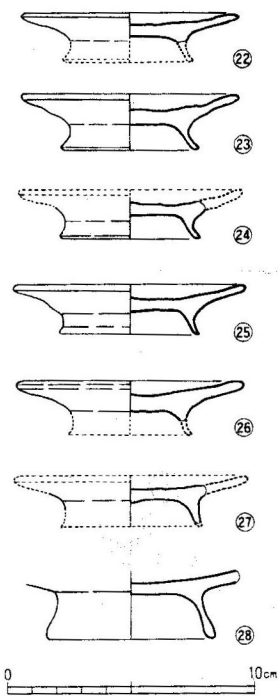
土師器椀 いずれも底部の破片で全体を知り得ない。③は低い断面三角形形状の高台を有す小振りの椀と思われる。④は高台と体部の境に罫をめぐらす特徴ある形態のもので托形をなす。調整は内底部ナデ仕上げ、外面ヨコナデ・一方向のナデがみられる。胎土は細かな砂粒を含み緻密である。

坏 大きく二つのタイプがある。ヘラ切り離し底で底部から体部の厚さに大きな変化をみせず外上方に立ち上がる⑳・㉑と回転糸切り離し底で底部が厚く円盤状高合風の底部をなす㉒がある。㉑は口径約一一・五センチ・器高二・九五センチ・㉒は口



第1图

守岡遺跡出土土師器実測図



第2図 守岡遺跡出土土器実測図

径一・二・八〜一・三・二センチ・器高三・〇〜三・一センチと②④がやや大きいものの、胎土や製作技法と極めて類似しており、おそらく同一工人の作であろう。底部はヘラ切り離した後、横に指ナデ仕上げ、外面体部指を使った回転利用ヨコナデ、内面は回転利用ヨコナデに一部回転を利用しないナデがある。内底部は同心円の凹みができている。器壁は薄く造りは良好である。⑧は1点のみの出土で、糸切り離し底を呈するものもこの坏のみである。底部はすでにのべたように回転糸切り離し手法で、他の部分は回転利用ナデ仕上げである。底部が厚く円盤状高台風の形態をなし、底径が四・九センチと小さい。内底部中央が約2センチ程くぼんでいる。胎土・焼成とも他土器と異なり微砂粒を含むが精良粘土を使用しており、焼成も堅緻な焼き上がりとなっている。

小皿 図化できた小皿は11点あり他の器種に比較して出土量が多い。小皿は法量分布の差により次の二つの小グループに分類できる。一つは⑨〜⑮の口径九・九〜一一・二センチ・器高一・六〜一・九センチを測るグループ、もう一つは⑯〜⑲で口径

守岡遺跡出土土師器一覽表

器種	法	量	胎	土	色	調	備	考
①	32号鑿穴 a(112) b 4.0	c 6.0~1 單位cm	砂粒多・小石混		内黒色 外淡黄褐色		内黒 内面に油痕 外面黒	
②	柱 穴 a(113) b 4.2	c 6.5	砂粒多・緻密		内外暗黄褐色			
③	3号土埴 a _____ b _____	c(4.8)	砂粒多 (石英・角閃石)		内外暗黄褐色			
④	32号鑿穴 a _____ b _____	c(6.4)	細砂多 緻密		内灰黒色 外灰褐色		托形 外面黒	
⑤	13号土埴 a _____ b _____	c(6.2)	細砂多		内外黒色		内黒	
⑥	13号土埴 a _____ b _____	c 6.5	砂粒多		内黒色 外暗黄褐色			
⑦	13号土埴 a(154) b _____	c _____	砂粒多 小石混 (石英)		内黒色 外暗黄褐色		回転糸切り	
⑧	32号鑿穴 a _____ b 16	c 4.9	微砂混 精良粘土		橙~淡黄褐(一部こげ茶)		板(スタンプ)状圧痕	
⑨	32号土埴 a(101) b(19)	c(6.6)	細砂多 金雲母微混		淡黄褐色~灰褐色			
⑩	32号鑿穴 a(102) b(16)	c(8.3)	細砂多		内外黄褐色			
⑪	13号土埴 a(102) b(19)	c(7.2)	砂粒多		内暗褐色 外橙~淡黄褐			
⑫	4号土埴 a(106~7) b 17	c(7.3)	精良粘土		内外黄褐色			
⑬	3号土埴 a(108) b 17	c(6.6)	砂粒混		内外暗黄褐色			
⑭	柱 穴 a(112) b 17	c(7.9)	砂粒多		内外暗黄褐色			
⑮	13号土埴 a(108) b(23)	c(8.8)	細砂多		内外暗黄褐色		口縁内面に油痕	
⑯	3号土埴 a(109) b 2.2~3	c 6.2~4	砂粒(金雲母・斜長石・角閃石・石英)		内外黄褐~白黄褐色			
⑰	13号土埴 a(109) b(22)	c(8.3)	砂粒多		内外黄褐色			
⑱	3号土埴 a(110) b(22)	c(7.7)	細砂多 緻密		内外黄褐色			
⑲	柱 穴 a(115) b 2.95	c 7.2	砂粒多 緻密		内外灰褐~暗橙色		内面に油痕	
⑳	柱 穴 a 1.28~1.32 b 3.0~1	c 8.1~2.5	砂粒多 緻密		内外灰褐~暗黄褐		底部に一条のへう記号?	
㉑	3号土埴 a(88) b _____	c _____	砂粒多 (石英・角閃石他)		内外暗黄褐色			
㉒	3号土埴 a(89) b 2.3	c 5.7	砂粒多 (石英・角閃石他)		内外暗黄褐色			
㉓	3号土埴 a _____ b _____	c 5.8	砂粒多 (石英・角閃石他)		内外暗黄褐色			
㉔	4号土埴 a(94) b 1.95	c 5.6~7	砂粒多 小石混 (石英)		内外黄褐色			
㉕	32号土埴 a(92) b _____	c _____	砂粒多 (石英・角閃石)		内外暗黄褐色			
㉖	4号土埴 a _____ b _____	c _____	砂粒多 小石 (石英)		内外黄褐色			
㉗	32号土埴 a _____ b _____	c(6.8)	精良粘土		内外白黄褐色			

表 1

脚台付皿

一〇・八〇一・〇センチ・器高二・二〇センチを測るグループである。両者の差は口径や底径には現れないが器高にその差をみ出すことができる。前者は一・五センチ以上二センチ未満の一群で後者は二センチ以上二・五センチ未満の一群であり、集中する分布範囲の差からみて両者とも規格性を有した一つの小皿として認めることができ、器高差を意識した二者の小皿が製作されたものと思われる。ちなみに坏としたものは三センチ前後を測り小皿とは明確に分類できる。これらの小皿は全てヘラ切り離し手法であり、⑨の底部には板状圧痕を認めることができる。体部は内外とも回転利用のナデ仕上げ、内底中央には一部の土器に一定方向のナデを加えるものもある。形態は底部より明確な稜をもたず外上方へまっすぐのび、端部を丸く仕上げるものが大半を占めるが、⑩のように一度段を有し立ち上がるものもある。なお、⑪の口縁部内面の一部に油痕が認められる。⑫は坏とよく似た特徴をもっている。

脚付皿 脚部が低い⑬と高い⑭のタイプがある。脚部の低いものはきわめて規格性のつよいもので口径八・八〇九・四センチ、器高一・九五二・三センチ、脚径五・六〇五・八センチとなっている。内外とも回転利用のナデ仕上げで、胎土には多量の砂利（石英・角閃石）を混入しており、焼成・色調もきわめてよく似た特徴を有している。脚は大きく外方へふんばっている。⑮は皿部を欠いており、脚部はやや外方にふんばり端部がやや肥厚しまるくおさめている。精良粘土を使用している。

(三) 土器の年代

今回取り扱った5遺構出土の土師器群は、ほぼ一時期の所産であるとのべた。それは、黒色土器・小皿・脚付皿をベースにして、各遺構のクロス・チェックを行なった結果、極めて類似した内容の土器群と判断できるからである。従って、ここでは前節でのべた特徴をもつ土器群を大きくはセットとして把握しておきその年代観について検討していきたい。

豊後地域における歴史時代の土器研究は、発掘事例の貧困も合いまって、特に平安時代についてはその実態はほとんどわかっていない。大分市地蔵原遺跡・豊後国分寺跡等の調査において、八・九・一〇世紀の一部に関して資料の蓄積がある程度で

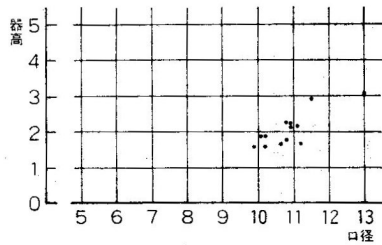
ある。従つて、きわめて地域性豊かな土師器の編年作業に関しては豊後地域の内側からのみではその年代比定は難かしいと言わざるを得ない。さらに、守岡遺跡に関する文献や実年代を与える発掘資料もないのが現状である。そこで、周辺地域において当該期の資料がまとまつてあり、編年研究の先進地域との比較でその年代を推量する他ない。

守岡出土の土師器は、その特徴からみて平安時代の幅でおさまることはまず間違いないと考えられる。従つてここでの年代比定は平安期のどこに位置付けられるかという点にある。しかし、比較の対象となる土師器に碗や坏がきわめて少ないため難かしい点も多い。底部の切り離し手法のあり方や、黒色土器・坏・小皿の法量分布・托・脚付皿などの比較を中心に行なつていきたい。

1 豊前宇佐宮弥勒寺跡SK-3遺構との比較

碗（黒色土器・土師器）・坏・小皿・脚付皿・鉢・鼎などの器種が出土している。黒色土器・坏・小皿・脚付皿の一部の一群と形態・法量等類似するが、決定的に異なることは、坏・小皿による底部切り離し手法の差にある。SK-3遺構ではヘラ切り離しと糸切り離しの両者が認められ、後者が中心を占めている点にある。守岡例は⑧を除きすべてヘラ切り離しにある。さらには、SK-3遺構出土の坏・小皿の法量分布にかなりのバラつきが認められることである。宮内克己氏は、このことについて坏から小皿への分化期の複雑な様相を指適しており、SK-3遺構の年代を大宰府史跡や宇佐市において実年代の比較的明確な輸入陶磁器を出土した藤田遺跡出土の土師器等の比較から小皿・鍋・鼎の出現・坏・小皿の法量の多様性・やや高台の高い碗と皿の様相などから一一世紀前半に位置付け、宇佐地方での現段階における糸切り離し手法の出現期とし大宰府地域とは軌を一つにしないと述べている。^{注3}

以上のことから、守岡例は法量や形態については一部類似するものの、坏・小皿の底部切り離しに大きな差を認めることができ、SK-3遺構に比べ古い段階にあると言える。また、守岡例段階ですでに坏から小皿への分化は確実となったが坏・小皿の法量のバラつきはそれほど顕著ではない。小皿に二つのグループがあることがバラつきを意味しているとすれば守岡例段階



守岡遺跡出土小皿法量分布
(単位cm)

で法量が安定していないと言うことになり、SK-3遺構段階においてもその傾向が続くことになる。しかし、守岡例は出土量が圧倒的に少なく断定は控えておきたい。

2 大宰府史跡との比較

大宰府史跡ではSE-1558・SE-1083遺構の椀・小皿・

脚付皿・托に類似資料が認められる。森田勉氏はSE-1558を

一〇世紀中頃・SE-1083を土師器杯・小皿の形態・法量分布からみてSE-1558に後出し一一世紀前後に位置付けている。

そして、椀は土師器・黒色土器とも体部中位で湾曲させる点は九世紀と同様であるが、湾曲部が中位もしくは下位に遷り全体に丸味をおびた器形となり、一〇世紀中頃をすぎると口縁部を外反させるようになる。そして、小形化した杯から小皿が出現する。また、杯や椀を合成したような器形を呈する鋳付のものも少数ではあるが確認されるようになるがこの土器は一〇世紀中頃から一一世紀前半代に限定されると述べている。^{注6}

守岡例と比較すると黒色土器は、①・②は口縁部がやや外反すが⑦は外反せず体部の湾曲部もやや上位にあるように復原できる。黒色土器の口縁部の形態から比較すればむしろSE-1558段階頃の特徴を有している。しかし、⑦を出土した第13号土壙には小皿があり、他遺構のものと同立った差はなく、第13号土壙出土遺物を他と区別するのは難かしく、法量は小さく、むしろ弥勒寺跡SK-3やSE-1083に近い法量と言えるであろう。以上のことからみて守岡例は一〇世紀中頃後半頃の特徴を有していることになる。いずれにしても第13号土壙出土遺物を合わせて今後の課題になるう。

3 回転糸切り手法のある⑧について

⑧の杯はすでにのべたように他土師器とは異なり唯一糸切り底を呈するもので底部の形態に特徴がある。このような底部を

呈するものは長門・周防地域にその分布の中心があり、また、豊前地域にも類例をみることができ^{注7}。このことからみて、これらのいつれかの地域よりの影響か搬入品の可能性が強いと考えられる。そして、他の土師器に全く糸切り底が現れていないことからすれば在地系の土師器は依然としてヘラ切り離し手法を使用しており糸切り離し手法は定着していないものと考えられる。しかし、豊後に最も近接した宇佐宮弥勒寺跡SK—3遺構の段階にはすでに糸切り離し手法がある程度普及・定着しており豊後における糸切り離し手法の出現と定着といった視点からみれば1点の出土ではあるがこの土器のもつ意味は重要となろうそこで周防・長門地域そして豊前とりわけ北部地域における糸切り離し手法の出現年代を探る必要がある。

周防地域における奈良から平安時代初期にかけては須恵器が主流を占め、特に供膳形態の土器では6/7割を占め、平安時代中期になると須恵器の減少に伴い、土師器が主流となり、黒色土器・緑釉陶器など現れ、平安時代後期から末頃には土師器が主体となり、中国製陶磁器が増えることされる^{注8}。このような動向の中で、守岡例に比べ古い段階の土器群と考えられる周防国府跡東南隅発掘区SD—105・106出土土器群がある。黒色土器・土師器坏・脚付皿に若干の須恵器・緑釉陶器が出土している。坏の形態は円盤状の底部に直線的にのびる体部をもち、口縁部をわずかに外反させるもので坏の中心をなすものである。底部の形態は⑧によく似てはいるがそのものではない。底部はヘラ切り底である。報告者は年代を決定的な資料はないが「軋元大宝」の出土・輸入陶磁器がないことなどから一〇世紀代に比定しており、土師器・黒色土器に糸切り離し手法がみられないのに緑釉陶器の一部（須恵質のもの）に認められる^{注9}としている。このことは、守岡例の⑧はすでに糸切り底を呈しており、SD—105・106等の坏から変化した新しい段階の坏であるものと考えられる。周防地域ではSD—105・106段階では土師器に糸切り離し手法は出現してなく、須恵質緑釉陶器のみに糸切り離し手法が認められるのであり、緑釉陶器の産地の認定には重要な意味を内在している^{注10}。

次に長門地域での状況をみると、秋根遺跡で報告者は平安時代の土器を4型式に分類し、糸切り離し手法の出現をIV—2段階に位置付けている。底部の厚い坏が多く、糸切り底の坏が出現するとしている。そして、IV—3段階にはヘラ切り底は消失

しすべて糸切り底になるとのべている。^{注11} 底部の厚い坯は周防地域でもそうであったように、守岡例と大きくは類似するものと言える。秋根遺跡の報告者は実年代については明らかにされていないが、周防の鑄銭司跡の報告者は秋根遺跡の分類を整理するなかでIV-2を一〇世紀代・IV-3を一世紀代に位置付ける考えを出している。^{注12}

最後に豊前地域の状況についてみてみる。宇佐市についてはすでにのべているのでここでは北部地域についてみる。

谷口俊治氏は、砥石山遺跡の報告書の考察で平安時代の土器編年案を提出している。これによると平安時代を4型式に分類し、回転糸切り離し手法の出現をII型式の古段階すなわち一〇世紀の早い時期を想定している。^{注13} この土器に似たタイプのもものは豊後地域でも若干の類例^{注14}を見ることができが守岡例とは異なり単純に比較はできないが、むしろII型式の新しい段階の土器に近い内容と言えるであろう。

以上みてきたように三地域での糸切り離し手法の出現・普及・定着は、地域によって現れる器種が異なるなど他にも複雑な展開が想定される。しかし、その出現はおおむね一〇世紀の間に位置付けられそうである。豊前南部地域においても弥勒寺跡SK-3遺構の状況からみてもその出現はSK-3段階よりはさかのぼるものと考えられる。

以上、①②③にかけて周辺地域との比較を行ってきたが、これらの検討から守岡遺跡出土の土器群の年代を推量すれば、大きくは一〇世紀代に比定できる。しかし、さらに細かな位置付けをおこなうためには出土量が少なく十分なセットがない。また、今回提示したセット関係にも若干の疑問が生じてきたため今後の課題とする部分が多く残った。これらの点を考慮しあえて言えば一〇世紀の後半代（仮に一〇世紀を前半と後半に分けて）に位置付けられるであろう。

四 おわりに

今回あえて再録したのは、すでに述べたように豊後地域に当該期の資料が極めて少ない点に起因する。歴史時代の土器研究はまさに緒についたばかりであり、豊後地域における古代・中世・近世をとおした編年的研究がなされなければならない。な

かでも、豊後で中心的な位置にあり豊後国府が存在する大分市の状況が最も重要であり、問題意識をもった計画的な調査を実施して行くことが望まれる。さらには、これまでに調査された遺跡の公開が必要であろう。

県内では県北地域（例えば宇佐宮弥勒寺跡や神宮周辺の遺跡群）での調査において、成果をあげつつあり、今後の計画的な調査により、そう遠くない日にまとまった成果が期待される。その反面、豊後地域での遅れが目立っており、この地域での進展が今後の急務となっているのである。

最後に、このノートを掲載する機会を与えて下さった後藤宗俊氏をはじめ多くの方々より御指導・御協力をいただいた。氏名を記して感謝申し上げます。真野和夫・菊田徹・小倉正五・讃岐和夫・村上久和・宮内克己・後藤一重・佐藤良二郎

注1 大分市教育委員会「守岡遺跡」一九七九

2 例えは代表的なものを上げると菊田徹『白杵右仏群地域遺跡発掘調査報告書』白杵市教委・小倉正五「宇佐地方の瓦器碗について」『古文化談叢第14集』・村上久和「大分県中津地域出土の瓦器碗について」『古文化談叢第14集』・宮内克己「宇佐宮弥勒寺出土の土器」『古文化談叢第14集』・渋谷忠章・後藤一重「伐株山城跡調査報告書」玖珠町教委などがある。

3 宮内克己「宇佐宮弥勒寺出土の土器器」『古文化談叢第14集』一九八四

4 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和五四年度発掘調査概報」一九七九

5 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和五一年度発掘調査概報」一九七七

6 森田勉「筑前型瓦器碗の成立課程」『古文化談叢第14集』一九八四

7 豊津町教育委員会「幸木遺跡」一九七六

8 吉瀬勝康「周防国府出土の瓦器」『古文化談叢第14集』一九八四

9 防府市教育委員会「周防国府昭和五三年度発掘調査概報」『防府市文化財年報Ⅱ』一九七九

10 山口市教育委員会「周防鑄銭司跡」一九七八

報告者は土師質・須恵質の緑細陶器が周防・長門地域とで出土量が異なることなどから、須恵質の緑釉陶器は東海地方との関連性を強

調している。そして長門地方に多い土師質の緑釉陶器がいわゆる長門瓷器であるならば鉛釉陶であった可能性が強いとしている。

11 下関市教育委員会「秋根遺跡」一九七七

12 10に同じ

13 谷口俊治「砥石山遺跡第四章考察」『北九州埋蔵文化財調査報告書』第28集 財北九州市教育文化事業団一九八四

14 臼杵市堂メキ遺跡・大分市豊後国分寺跡及び地頭原遺跡等に出土しているが、形態はきわめて類似するが、底部はすべてヘラ切り底である点が異なっている。

その他の参考文献として、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館一九七八・大分市教委「豊後国分寺跡」一九七九・臼杵市教委「臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書」一九八二・真野和夫「地蔵原と弥勒寺の遺跡」『大分県史古代篇』大分県一九八四を使用した。

追記

菊田徹氏の教示によると、臼杵市堂メキ遺跡より須恵質の緑釉陶器片・黒色土器碗・土師器坏・皿が出土しているとのことである。詳細は報告をまたねばならないが、その内、須恵質の緑釉陶器は体部の破片のみで底部がないので切り離しの状態は不明であるが、黒色土器と坏の一部に糸底が認められるとのことである。このことから、弥勒寺跡SK-3遺構や守岡例との年代的関係が注目される。なかでも黒色土器に糸切り底が認められるということは、SK-3や守岡例の黒色土器には認められないことであり（これらの底部は最終仕上げにヘラミガキ・ナデ仕上げをおこなっており糸切りが観察できないことも十分考えられる。）豊前地域における瓦器碗の出現期の底部に糸切り底を呈する一群が存在することなどを考慮すると重要な意味をもっている。さらに、坏の一部の形態が周防から豊前にかけてのものに類似するものもあり、須恵質の緑釉陶器の搬入経路等を採る上からも今後これらの地域との関係を注目して行く必要がある。